

十字架に救われて

丸山 勉

[聖書] コリントの信徒への手紙一 1章 18節～31節

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにします。」知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたのではないか。世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることをしないようにするためです。神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

[序]教会と十字架

教会と十字架は、切っても切れない関係があります。この川越教会にも何ヶ所かに十字架の形を見ることが出来ます。地図でも教会のマークは十字架です。もちろんこれは単に形がシンプルで美しいからではなく、イエス・キリストの私たちに對する救いが、十字架において出来事となったことをいつも忘れないために、教会は十字架の形をシンボルとして掲げます。

今日からパウロが書いた「コリントの信徒への手紙一」を二ヶ月間読みます。これはユダヤ人であったパウロが世界伝道の結果、ギリシアの港湾都市コリントに作られたその教会に宛てて書かれた手紙です。その時パウロはエフェソにいたようですが、そのコリント教会の内側の様々な問題が耳に入り、いても立ってもいられないで手紙を書きました。

その手紙の中でまずパウロが強調したことは「十字架」でした。様々な問題が聞こえてくるけれども、その解決はイエス・キリストの十字架から目を逸らさないことだ、とパウロは言うのです。これは第一章だけではないと思います。パウロの最も言いたかったこととして、全体を貫く太い線のようなものだと言ってよいと思います。

[1]十字架がむなしくなってしまうように

パウロは、1:10 以下に記されている教会の中で起こった分派争いに対して、心を一つにして結び合うように、と勧めます。その際、分派の原因となった「自分が誰からバプテスマを授けられたか」というような違いが仲たがいに繋がっていることに対して、パウロはハッキリ言っています。1:17 です。

「キリストがわたしを遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるた

めだからです。」と。

「キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬよう」。一パウロにとって、教会内の不一致が起こるといことは、キリストの十字架をむなくする事だと言うのです。そしてそのことをパウロは語ろうとするのですけれども、面白いことを言いますね、「言葉の知恵によらないで告げ知らせる」と言っています。

[2]人間の知恵で理解できない十字架

つまり、十字架というのは、人間の知恵、人間の常識、人間の持っている物差しで理解できるようなものではない、ということパウロは知っていました。

もう既にクリスチャンである皆さんは、イエス・キリストの十字架というものを簡単に受け入れることが出来たでしょうか？すぐに受け入れることが出来たという方は幸いです。それは神様の恵みだと思えます。けれども、なかなか分からない、受け入れられないということが多いと思えます。私自身もそうでした。

当時のユダヤ人やギリシア人にとっても、「十字架」が神様の救いなのだ、と言われても、それはピンと来ないどころか、「何とバカなことを言っているんだ」という受け止め方だったのです。

ですからパウロは言うのです。1:21 です。

「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」

信仰というものは、人間の地平から生まれてくるものではない、神様がその人の心に働きかけて与えてくれるものなのだ。だからそれは人間の知恵を尽くした言葉ではなく、神様の言葉の語りかけを伝える宣教によるのだ、と言うのです。

[3]その「愚かさ」の内実

「宣教の愚かさ」、それは、神様のなさり方の愚かさです。そしてそれが徹底的に現されたのが、主イエスの十字架です。この十字架をよく見れば、いかに神様が人間の救いのためにバカなことをされたか、ということが示されてくるのです。

その愚かさかというのは、十字架の上で釘付けされたまま、敵対する者たちにたいして「父よ、彼らをお赦してください」と祈る愚かさです。

パウロ自身はこの主イエスの祈りの言葉を聞いた訳ではありません。けれども、まだパウロがサウロという名前でクリスチャンたちを迫害し、その弟子の一人であるステファノが殉教するその現場で、そのステファノの口から出た言葉を聞いたのです。それは、主イエスの十字架の赦しの祈りの言葉と全く重なっていました。使徒言行録7章最後の言葉です。

＜「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って眠りについた＞とあります。

また、その後の 8:1には「サウロは、ステファノの殺害に賛成していた」とあります。サウロはそのような男でした。

このステファノの執り成しの祈りというもの、やがてサウロが、復活の主イエスの声を聞き、三日間目が見えなくなったその中で、何度も何度も心の中に響いてきた祈りであったに違いありません。そして祈りのう

ちに「彼ステファノにあのように言わしめたのは他ならぬイエスだ。」と確信したのだと思います。

あのアウグスティヌスは、「もしあの時ステファノが祈らなかったならば、教会にはパウロがいないことになったであろう」と語ったと言います。

「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした」(コリントー 1:21)。それは、パウロ自身の体験からきた言葉です。

私自身も、教会に通ってもしばらく十字架が分かりませんでした。正直に言います。しばらくは分ったフリをしていたと思います。しかし、ある時、うまく表現できないのですが、何か特別なことがあったという訳ではないのですが、自分がひどく惨めに思え、何の価値もない様に思えて仕方がなかった時があったのです。

けれど、そんな時間の中、私は静かな音楽を聴いていたのですが、私の頭の中に、イエス様が十字架にかかり、血を流し、頭を垂れているお姿が浮かんできました。私は「ひどい！何とひどいことを神様はされたのか！」と思ったのです。そして、次に、「こんな惨めな私という一人の罪人ために、イエス様を犠牲にされたのですね」と、神様の愛が迫って来、目から熱いものが溢れてきました。「ああ、これがあなたの愛なのですね。」一心からそう思ったのです。

[4] 誇るものは何もない

十字架は、ただ、神様が用意された救いの方法です。ですから、パウロは、救いということにおいて、何ら自分の中に誇りうるものを持っておりません。イエス様に救われる、というのほどこまでも「受け身」なのです。その意味で、キリスト教信仰に「修行」はありません。修行で救われるということならば、「格差」が出来るということになってしまいます。格差が出来ると、そこに人間のプライドや劣等感が入り込みます。それが人間同士の交わりをもいつしかギクシャクさせるものとしてしまいます。

パウロはこの第一コリントの 15 章では、キリストの復活について誰もが書き得なかった素晴らしい神様からのメッセージを書いていますけれども、その中で自らのことをこのように記しています。(15:8~10)。

「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。神の恵みによって今日のわたしがあのです」。

「神の恵みによって今日のわたしがあのです」。—私たちは、皆そのように言えるのではないのでしょうか。「今あるは、ただ神の恵み」！そうです。迷い出た私たちを探し出し、赦し、救ってくださったのはひとえに神様の御わざです。

ですからパウロは今日読んで頂いた第一コリント 1:29 以下で言っています。

「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇る事が無いようにするためです。神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。」

[5]この世界に立ち続ける十字架

東日本大震災が起こった時、ある著名な写真ジャーナリストの方が絶望的な思いからだったのでしょうか、「私は今、神を疑う」という内容の文章を朝日新聞の『AERA』という雑誌に被災地の写真と共に載せ、私はそれをたまたま読んでショックを受けました。ちょっとご紹介すると、こういう文章です。

「だがこのたび、神は人を殺した。土地を殺し、家を殺し、たくさんの善良の民やいたいけな子供たちや、或いは動物たち、それらを残酷な方法で殺した。私は水責め火責めの地獄の中で完膚なきまでに残酷な方法で殺され、破壊し尽くされた三陸の延々たる屍土(かばねど)の上に立ち、人間の歴史の中で築かれた神の存在を、今疑う。それはイワシの頭を信じる愚か者が叫んだように“罰(ばち)が当たった”のではなく、神はただのハリボテであり、もともとそこに神という存在そのものがなかったただけの話なのだ。神幻想から自立し、自らの二本の足で立とうとする者ほど強いものはない。」

私はショックを受けましたけれども、これは間違っていると思いました。自然現象と神様を一緒には出来ないと思いますし、真の神様はこのような悲しい現実をただ意地悪く眺めているだけなのか、私はそうではないのではないかと、思うのです。

ここでも見失ってはいけないのは「十字架」です。主イエスの十字架は、この大地にその根を張り、しっかりと立ち続けているのです。23 節で「わたしたちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています」とありますが、それは十字架が過去の出来事ということにとどまらず、今も存続している、つまり、今も人間を愛し、執り成し続けている十字架のキリスト、という意味合いがあるようです。もうキリストは天にお帰りになったから、この地上のこと、人間のことはもう痛みを思わない、ということはないのです！

パウロは言いました。第一コリント 1:18「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」

十字架は、愚かしく見えますが、実は救いへと導く生ける神の「言葉」なのです。「言葉」とは「ロゴス」というギリシア語ですが、単なる言葉というより、意味とか真理と言ってもよい言葉で、その意味で「十字架の言葉」とは、十字架の本質、つまり十字架という神の偉大な知恵、と言ってもよいと思います。

[結]どん底から支える十字架

十字架——そしてそれは、神様ご自身が私たちを抱きとめるために、イエス様において開かれた神様の「御腕」そのものと言ってもよいのではないのでしょうか。

最後に、週報にもご紹介致しました、もう 30 年以上も前、元東京神学大学学長であった熊澤義宣先生が『病床からのメッセージ』として、NHK のラジオ放送で証しをされたその手記を読ませて頂きたいと思います。熊澤先生は学長になられて、さあこれからという時に突然心筋梗塞に倒れられ、一命は取り止めたものの、しばらくは集中治療室で動くことが出来ない日々を送られました。その時のことです。

「私は何も出来ない。言ってみれば無力の極み、或いはどん底と申しましょうか、そこに身を横たえなければならぬ姿になった時、実は私をそのどん底の一番下の所で受け止めてくれているものがある、それが、実はイエス・キリストのあの十字架の姿なんだということがはっきり見える体験をしました。

全く無力な姿でベッドの上に横たわり、どん底に落ち込んだ私を、赦して、血を流してまでも私の一番下の所で、ベッドの下でしっかりと受け止めようとしている神の愛がその十字架の中には含まれているんだということに気がつきました。十字架というものは、私にとってこんなにも身近なものであったか。そして私を一番どん底で支え、受け止め、そして生かそうとされている神の意志は、実は、神から最も遠いはずのこのような私の、価値のない、或いは価値に反したそういう姿、聖書ではこのことを罪という言葉で言うことが多いわけですが、これを赦してなおかつ生かそうとされている神の愛の力なんだということに気付かされたわけです。

この愛の大きな手にしっかりと支えられて自分は今ここに横たわっているんだということに気がつきました時に、この病床は私にとって決して茨に満ちた場所ではなくて、そこにも神からの光が射し込んでいると気付いたのです」。

熊澤先生のこのお証しから、私は申命記 33:27 のみ言葉を思い起こしました。
「とこしえにいます神はあなたのすみかであり、下には永遠の腕がある」。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、尊い御名を讃えます。
「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」。

あなたは、主イエス・キリストの十字架において、わたしたちへの限りなき愛を示して下さいました。それがあまりに私たちの思い、私たちの常識を超えているので、すんなりと受け入れることが出来ません。私たちはあなたの愛を受け入れることが出来ない程傲慢なのだと思います。どうぞ、聖霊の力によって、あのサウロがパウロへと変えられ、あなたの恵みに圧倒されて「私のとって生きることはキリストだ」と言って生き抜いたように、私たちの、石の心をも砕いて下さり、隣り人と共に、あなたの十字架の愛に応じて生きる生涯へと導いてください。

どのような時も私たちを離れず、また絶望と思える場所でこそ、私たちはあなたの確かな御手に支えられていることを信じる信仰をお与え下さい。

主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。
アーメン。